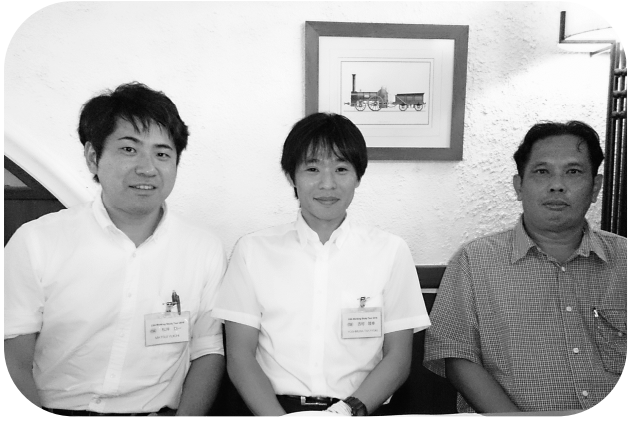
2016ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

連合　連帯活動局　松　井　裕　一



私事で恐縮なのですが、今回の「ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアー」に参加させていただいたことで、“人生初海外”となりました。このような機会を与えてくださったＣＳＡ、連合事務局に大変感謝申し上げます。現地では、当初は食事面もそうでしたが、一番の壁は「言葉」。この７日間、一緒に行動させていただきました山岡事務局長や現地の方々、そして、７名の団員の方々には幾度となく助けていただきました。一人では無事に日本に帰国できたかどうか分かりません。本当に、本当に、ありがとうございました。

ＣＳＡが行っている事業において、現地を視察して「生の声」等を聞かせていただき、痛感したことがあります。建設を支援した小学校２校の代表者ともに、要望について「瓦屋根に変えてほしい」と開口一番に言ったように、修繕の充実。さらに、教員数等の不足。衣類を現地まで運んで実際に人の手に渡るまでの、輸送費と輸送ルート（期間）に関する課題。常に新しいことを展開することも大切ですが、“その後”のことをもっと考えて取り組まなくてはいけないと強く感じました。何事にも当てはまるであろう、このような取り組みは、“完結”はないのかもしれません。

私自身、高校時代は所属運動部の寮で３年間生活していました。そういうこともあり、サンティパープ高校寮は多くの訪問先の中で、特に関心がありました。

前述の建物の修繕に関して要望も多々ありましたが、食べ盛り、育ち盛りの高校生。ＣＳＡが年間で支援している年間予算では、どうしても食事量が足りないという意見が関係者から聞かれました。平日はメイドの方が作り、「美味しい」と評判のようです。ちなみに、人気のメニューは、①野菜炒め、②野菜スープ、③魚の辛みスープ。土曜、日曜は、寮生たちが食材を買い出しに行き、自炊しています。敷地内で育てている鶏（おそらく卵）や栽培している野菜も使っているそうです。

予算のアップや食材の見直し等で「量」を改善することができても、次の課題は「質」です。寮監の先生に「栄養面のバランスや偏りは？」と尋ねると、「まだそこまでは考えられない」ということでした。“より良い食生活”の実現には、粘り強く取り組んでいかなくてはいけません。

寮内では、自宅では親の仕事を手伝う時間が少なくないですが、学習時間が多く取れる。そして、各々の得意科目（分野）を友だち同士で教え合うことができるといったメリットを、何人もの生徒が口にしていました。

「これからも寮の支援を続けてください」澄みきっていて真っ直ぐ相手の目を見る“目力”に、志し高く、充実した寮生活をしていることがうかがえました。

この“目力”は高校生だけに限らず、ラオスの方々と会話をした時、常に感じることでした。同大使館の大西参事官がお話された「(ラオス人は) 大人しく、はっきり物事を言わないが、ものすごく観察力が高い。平和が大好きで争い事が大嫌い」。私も現地滞在中に「控えめな人が多いな」と常々感じ、“古き良き日本人”に似ているのでは？　とも思いました。しかし、公式行事の場面以外で、子どもたちにこちら側が何かをあげる時は、言葉を選ばなければ「(程よい) 取り合い」となり、ハングリーな面を見られたことは、個人的には新鮮でした。

最後に。昨年４月に私は連合に入局いたしました。今期間中、団員の方々には組合活動の心構えや志をはじめ、多くのことを教えていただきました。皆様、恩返しできるよう、今回の経験、そこで感じたことを、少しでも早く組合活動に生かしていきたいと考えております。

2016ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

ＵＡゼンセン　サニーマート労働組合　塩　坂　博　史

今回の大きな成果は、当初の目的であった、自分の目でしっかりと見て現場で感じて、それを糧として次の活動へとつなげるということであったが、１週間のツアーにおいて、日々が大きな刺激であり、特に現地の人々とのあらゆる交流においては、自分自身の価値観を大きく揺さぶるものであった。

特に、今回のコンケオ村小学校（３番目校)、ポンサイ村小学校（７番目校）の訪問では、ＣＳＡの支援で建てられた小学校を見学し、現地の校長先生や教職員の皆さん、またＰＴＡの役員の方々ともお話ができ、教育の重要性や現状の課題について情報共有ができたことは有意義なことだった。学校の運営は、予算が少ないために教職員やＰＴＡそして、村人の協力の上成り立っていること、ＣＳＡの今までの支援に対して感謝のお言葉があった。しかし、２０年前にＣＳＡの支援で建てられた校舎は、支援の歴史を感じるとともに老朽化した校舎（直したくても予算がなく直すことができない）を目の当たりにして、建てた後のフォローアップが早急に必要であり、まだまだ教育の予算が少ない中においては継続した支援も必要だと感じた。また、子供たちも家庭の中での労働力ということで、農業の繁忙期には学校へ通えないといったことも大きな問題であり、教育を受けたくても受けられない状況をなくすことも含めて、ハード面のフォローアップ支援や農業の幅広い技術支援・教育のソフト面でも支援が必要だと感じた。子どもたちとの交流では、折り紙教室は大いに盛り上がり、お互いに笑顔であふれていた。

短い時間ではあったが、子供たちと一緒になって楽しんだ折り紙教室や教員との綱引き等の交流を通じて、支援はしていたが遠い存在だったものが、より身近な存在に変わる瞬間であった。触れ合い相手を知ることは活動していく上で、原点であると感じた。勉強できる環境整備と共に、ちょっとした日本にある校庭の遊具施設などもあればと思った。とにかくＣＳＡの支援が大きく貢献している現状を知り、また子供たちの純粋な笑顔が印象に残った視察交流であった。

また、ＣＳＡ高校生寮訪問や卒寮生との交流会では、寮生のそれぞれの夢を聞かせていただき、笑顔で夢を語る姿に心打たれる場面もあった。特に日本に「留学してもっと勉強したい」と言っていた卒寮生との交流は、日本に住む私たちにとって嬉しくもあり、日本を見つめ直すきっかけにもなった。国は違えど子どもは宝、ラオス・タイの子供たちの屈託のない笑顔や夢を語る姿に、教育の大切さを改めて感じ、継続した支援の必要性や支援の在り方を考える機会になった。

また、タイにおいての、ウドンタニ貧困者保護センターにおける衣料引き渡し式では、熱烈な歓迎を受け、今までのＣＳＡの地道な支援が評価されていること、継続した取り組みの大切さを実感した。事情はあれ支援が必要な人たちがいて、しっかりと私たち組合員の思いが現地の人たちに届いていることを身をもって確認できた。しっかりと思いを届ける為に活動の広がりとともに支援品輸送費の問題やカンパのあり方も今後の課題であると思う。私たちが支援している衣料の保管庫（ラオス救援衣料保管庫、タイ社会開発福祉省救援衣料倉庫）も視察したが、日本から遠路運ばれしっかりと保管され、現地に届けられていることも確認できた。

ラオス・タイでの５日間を通じて感じた事は、言葉は通じない中ではあったが、屈託のない笑顔やありがとうの気持ちがあふれていた。特にラオスは広大な国土に６００万人程度の人口しかない為、税収が少なく発展途上の国ではあるが、出会う人たちを見ると、自分自身特に『幸福とは何か』を問われているように感じた。温厚なラオスの人達は、決して裕福ではないが、家族や友人とのつながりを大切にしている感じで、古き良き時代の日本によく似ていて、そのような中に価値を見出している。日本は戦後、経済的に発展してきたにも関わらず、競争社会の中でそれゆえ無くしてきたもの、家族とのつながりや地域とのつながり、あらゆる場面で個人主義へと突き進んできたことを見つめ直すことも必要であり、そのような意味において、生きていくことの意味や本当の幸せとは何かというのも今一度考えさせられた。

最後に、今回のツアーでは団長として、お世話が行き届かなかった点は多々あったとは思うが、チームの皆さんのご協力により、すべての予定が滞りなく無事に終えることができたことに感謝するとともに、それぞれがしっかりと支援の現状を自らの目で見て感じて思いを新たにできたことは、それぞれの組織において今後の活動に生かされると確信している。参加させていただいた構成組織の皆様に感謝したい。本当にありがとうございました。

2016ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

ＵＡゼンセン　帝人労働組合岩国支部　彦　坂　健　太

今回の２０１６ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加し、貴重な体験・経験をさせて頂いた事をＣＳＡ事務局の皆様、ツアーに参加した皆様そして、ＵＡゼンゼンの皆様、職場、関係者の皆様にお礼申し上げます。

ラオス・タイと聞いて全くイメージが無く更に海外経験も無かったので不安でいっぱいでした。今回のツアーは帝人労組としても初めてだったので不安な気持ちとラオス・タイとはどんな国なんだろうかという好奇心で日本を離れました。

羽田空港国際線ターミナル内の会議室でチームの顔合わせを行い、私は年齢的にも一番下だったので、これから１週間上手くやっていけるだろうか？どんな人が参加しているのだろうか？不安な気持ちでいっぱいでしたが懇親会のおかげかチームメンバーとすぐ打ち解ける事ができました。チームの雰囲気は上々で、初めての国際線に乗り込みました。

今振り返ってみると１日、１日は長いようで短く、チームの結束力も固く、各役割分担を着実にこなしていくメンバーばかりでとても充実したスタディ・ツアーでした。
スタディ・ツアーで特に印象に残っているのは学生との交流と衣類倉庫の視察、衣類引き渡し式です。

学生との交流では小学生から高校生まで沢山の方との交流がありました。ラオスの小学校では教室を見学し日本の学校との違いに驚かされました。小学生に日本の折り紙を教えた時は皆真剣で興味を持って取り組んでいたのは印象的でした。折紙の兜をかぶって笑顔の子供達、紙飛行機を一生懸命飛ばす子供達、そんな子供達を見て心を洗われました。私は小学校では写真担当だったのでレンズを通して子供達の笑顔に思わずシャッターを押さずにはいられませんでした。おかげで写真はいっぱいになりました(笑)！！

高校の寮生また卒寮生との交流では、夢を語る寮生達、英語を流暢に話す卒寮生、更には日本語の話せる卒寮生もいたことに驚きました。夢を語る寮生は目標も高く、寮内に掲示してあった日本語で「うえにはうえがある」と書かれた掲示を見た時は驚きました。これは先輩からの言葉で皆が助け合い、上を目指して努力している事がよくわかります。寮生達も決して恵まれた環境で勉強してないのも現実です。やはりここでも問題は山積みでした。
そんな小学生から卒寮生まで交流できたことは自分にとってかけがえのない宝物になった事は間違いありません。そして自分自身も「学生に負けない高い目標を持って頑張らないと」と痛感させられました。

このスタディ・ツアーではタイ・ラオスでの日本大使館、地雷博物館、ＡＡＲでの活動、様々な方とのディスカッションは国の置かれている状況など、とても勉強になり問題点も多くある事を改めて感じるものになりました。

タイ・ラオスの衣類倉庫視察では、到着から引き渡し式に参加する事で衣類の流れを学びました。衣類の多さ、職員の少なさに驚き、問題は山積みで輸送費の件、衣類の数が足りないなど職員との話、たくさんの意見が挙がりました。
一方現地で衣類がとても喜ばれている事を肌で感じ、タイ・ウドンタニでの引き渡し式の盛大さには驚きを隠せませんでした。

今回の活動を通して多くの事を学ぶ機会を与えて下さった皆様に本当に感謝し、自分に何がで

きるか考えた時、やはりこの活動を多くの方に知ってもらう事だと思いました。活動を続け、多くの方に参加してもらう。一つ一つ問題を解決していく事の大切さを学ばさせて頂きました。

最後にチームメンバーに感謝し、皆さんが個々の現場で活躍される事を祈ってます。本当にお世話になりました。最後はヌ～ン・ソ～ン・サ～ン・ペプシーでお別れですね！！

2016ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

ＵＡゼンセン　ポケットカードユニオン　吉　村　隆　幸

今回のＣＳＡワーキング･スタディ･ツアーに参加し、先ず以って、貴重な経験をさせていただきましたＣＳＡ事務局の皆さま、この機会を与えていただきましたＵＡゼンセン及び自単組へ厚く御礼申し上げます。

毎年､ＵＡゼンセンのボランタス活動の一環である｢中古衣類を集めて送ろう」の取り組みで、自単組で中古衣類を集め、衣類を分別して発送をしておりましたが、発送後はタイ・ラオスにおいて必要な方に役立てられるのだなぁということしか思っておりませんでした。

今回ツアーに参加し、現地で中古衣類を自分の目で見て、実際に現地の人へ手渡しをすることが出来、中古衣類の活動の意義を深く理解することが出来ました。また、ＣＳＡの活動で学校や高校の寮の建設等を行っていることの認識がなかったので、中古衣類の活動をはじめ、ＣＳＡの活動を広く浸透させる必要があると思いました。

また、今回のツアーで印象に残っていることは、現地の人々の温かさでした。常に、「ありがとうございます」感謝の気持ちを伝えられました。サンティパープ高校の寮生の皆さんにおかれましても、質問に答えていただいた後に必ず、「お幸せをお祈りいたします」、「ご健康をお祈りいたします」、「ツアーで様々なところに行かれると思いますので、どうぞお気をつけて」と仰っていました。我々日本人は、初対面の方へここまで言える人は少ないなと感じました。

そして、それらを裏付けることをラオス日本大使館の大西参事官からお聞きしました。「ラオスの人々は幸せのかたちを大切にする」、「ラオスの人々は精神的に裕福である」、「ラオスの人々の日常生活をみてほしい」、「ラオスの人々は争いごとを嫌う」、「ラオスの人々は平和が大好きである」等。たとえ、生活が貧しくても「幸せ」を感じることが出来るのがラオスの人々であり、それが精神的に豊かで幸せな国民につながるのだと感じました。

最後に、今回のツアーでは山岡事務局長に大変お世話になりました。また、８日間を共に過ごした参加メンバーの皆さん、ラオスで案内通訳をしていただいたフンペンさん、本当にありがとうございました。コプチャイ・ライライ！　ポップ・カンマイ！！（ありがとう、さようなら）

2016ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

ＪＡＭ　タダノ労働組合　佐　山　顯

まず始めに、今回のＣＳＡワーキング･スタディ･ツアー参加にあたり、ＣＳＡ事務局の方々をはじめ一緒に参加したメンバーの皆様に感謝を申し上げます。また、このツアーに参加する機会を与えてくれたＪＡＭの皆様へお礼を申し上げます。

ラオスでは３番目校と７番目校の小学校を訪問させていただきました。ラオス中心部ではインフラの整備も進んできていますが、小学校までの道のりはテレビでしか見た事のないような砂埃の舞う道でした。小学校までの車中で、「どのような性格の子供たちがいるのだろう？」、「私たちが訪問して萎縮したりしないだろうか？」等々、期待と不安でいっぱいでした。

実際に訪問すると、先生方や子供たちの笑顔に迎え入れられて温かい気持ちにさせて頂きました。私たちから見れば厳しい環境の中で生活をしていますが、自分よりも心が豊かな人達ばかりで、こちらが色々な事を感じ考えさせられました。ラオスの人たちだけでなくツアー参加者も含め、心から笑顔でいる人の目は輝いていて綺麗だなぁと思いました。そして、自然と全員が笑顔になれて幸せな気分に包まれていました。

課題として感じた事は、２校共に感じましたが、老朽化が進んでいる事を目の当たりにしました。学校を建てた後のアフターフォローは今後の支援を考える上で大切だと感じました。今の活動を進化させていく必要性を感じました。

その他に、衣類保管庫、日本大使館、教育省、難民を助ける会等の訪問や意見交換をさせていただきました。様々な問題を聞き、多くの感謝の言葉をいただき、色んな事を感じました。衣類に関してはタイとラオスの分配比率をどう改善するのか、日本大使館でのお話を聞き今後のＣＳＡとしての活動にどう活かすのか、等々、自分でできる事や組織でやるべき事と真剣に向かい合っていかなくてはいけないと感じました。

最後に、ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加できて、多くの財産を得ることができました。一緒に参加した仲間との出会い、行く先々での人との出会い、どれも私にとっては大切な宝物です。今後もこのような機会があれば参加をし、様々な事を得て一つ一つ成長していきたいと思います。本当にありがとうございました。

2016ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連　三菱重工労働組合　甲　斐　久　資

まず今回、このツアーに参加させていただき、ＣＳＡの活動やラオス・タイの文化に触れる貴重な経験が出来たことにとても感謝したいと思う。

三菱重工労組は毎年本ツアーに参加をさせていただいており、救援衣類を送る運動も例年取り組んでいる。この活動も単組内で定着してきている中で、実際に衣類が現地でどうなっているのか？実際に自分の目で見ることが出来る良い機会を得られたと思う。

今回のツアーで一番印象に残っていることは、やはり現地の方たちとの交流。行く先々で歓迎をされ、私たちの活動が皆さんにとって必要とされていることをあらためて認識できた。小学校では、日本でいう低学年の子供たちと折り紙で作った紙ヒコーキを運動場でみんなで飛ばし、とても楽しそうにしている姿を見て、なんとも感慨深いものがあった。同様にサンティパープ高校生寮の寮生や卒寮生との交流では、将来の夢や目標をもっていて、ぜひともかなえてほしいと思った。一方、訪問した小学校２校とも校舎は台風被害で屋根や天井が激しく破損していたり、高校生寮も経年劣化により天井の破損や、トイレも修理をすることになっていたようだが、まだ完了していない状況だった。国もなかなか細かい所までは手が回らないという話もあったので、ＣＳＡの活動の中で修繕などの支援にも力を入れていければと強く感じた。

衣類については保管倉庫2カ所を訪問し、ラオスの保管倉庫にて三菱重工労組から送った衣類をメンバーの協力も得ながら4箱を発見。三菱重工労組の衣類を倉庫で見つけることが出来れば、と思っていたので、発見できてよかったと感じた。発見した倉庫ではすでに半数は出荷したとの事だったので、すでに各地域の方々に届きつつあるんだなぁと実感した。

また、タイでの衣類の引き渡し式は、想像していたものよりあまりにも盛大でビックリ！でもそれくらい中古衣類を必要としている方が多くみえるんだなと実感した。式が終わって、受け取ったみなさんが笑顔で帰っていく姿がとても印象に残った。この活動の重要性をあらためて認識した瞬間だった。

今回のツアーでは多くのことを学ぶことが出来たと思う。在ラオス日本大使館で大西参事官から「先を見通した支援が必要。ラオスの負担にならない支援をしていかなければならない」という話があった。ＣＳＡの活動は必要とされているものと考えるが、支援の在り方についても考える良いきっかけとなった。

今後も衣類の支援も含め、積極的に取り組んでいきたいと思う。ありがとうございました。

2016ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連　ＩＨＩ労働組合連合会相生支部　祐　延　和　広

ＣＳＡの救援衣類活動において、５年間衣類の募集から仕分けと郵送まで一貫して担当していましたので、今回のツアーではそれなりに活動を理解して参加しているつもりでした。しかし、ＣＳＡの活動は救援衣類だけにとどまらず、学校の建設や補修も行っており、現地の方からの信頼が非常にあることも感じましたし、この活動に対し感謝されていることにも身を持って感じることができ、今後の活動への『糧』を得ることが出来たと感じています。次回以降の募集に必ず役立てたいと思います。

私は、中国やベトナムなどのアジア地域の海外経験が少しありましたので、当初は同じような国（車のクラクションだらけ、譲り合うという文化がない）なのだろうなと思い込んでいました。しかし、ラオスに到着してみると車のクラクションを聞くことは無く、交通ルールも守られていることに正直ビックリした！というのが第一印象でした。その理由について、ラオス大使館の大西参事官から説明があり、納得することが出来ました。ラオス人は『我慢強く、諦めない、争いごとを嫌う』非常に民度の高い国民性を持ち合わせているとのこと。日本企業のラオス進出も今後多くなるのではないかと感じました。

コンケオ村（３番目校）・ポンサイ村（７番目校）小学校訪問では、交流を通し学校で楽しく学び友達と無邪気に遊ぶ姿を見て、今後も支援を行い、教育や友達と遊ぶ機会を与えることは非常に重要な取り組みであると感じました。課題としては、子供の人数に対して教師が圧倒的に不足している点や老朽化した校舎の補修、維持管理、児童就労の実態など、継続していくための新たな支援のあり方を見直すことも必要ではないかと感じました。子供たちへの教育はラオス国にとっても有益であり、ＣＳＡへの期待の高さがうかがえました。

次に、ＡＡＲ・ＪＡＰＡＮ（難民を助ける会）へ訪問し、ベトナム戦争時の米軍の空爆により未だに不発弾が大量に残っている実態や、被害者や障害者への自立を促すための支援を行っていること、また現在進行中のシリア難民に対しての支援も計画されており、活動の幅の広さと重要な役割を担っていることに感銘を受けました。今年の２月には米国大統領が終戦後初めて訪問するとの情報もあり、この問題を早期解決することがラオス発展の近道であると感じました。

サンティパープ高校生寮では、ＣＳＡが寮費を支援し特に貧しい子供たちに教育の機会を与えることができており、寮生からは熱烈な歓迎をしていただきました。また施設や寮の設備を視察し感じたことは、特にトイレの水が出ないなど水回りの補修が必要であり、優先順位を付けて対応していく必要があると感じました。子供たちがよりよい環境で勉強が出来る様、支援する側も現地を目で見て確認することが非常に重要であると感じました。

最後に、ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアー参加にあたり、ＣＳＡ事務局長をはじめ参加メンバーの皆さんや運営に携わっていただいた多くの方々に助けられ、無事終了することが出来たことに感謝致します。また、参加のチャンスをいただいた基幹労連や構成組織に対しても感謝申し上げます。ありがとうございました。 ຂອບໃຈຫຼາຍໆ

2016ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連　ＪＦＥスチール労働組合連合会　宮　本　亮

ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して、まずはＣＳＡの事務局や機会を下さった産別の方、そして何より受け入れてくれた現地の方々に、素晴らしい経験をさせていただいたことを心から感謝申し上げます。

ＣＳＡの活動については、過去に参加した方から内容の報告を受けていましたが、今回参加して実際に現地を訪れ、目で見て手で触れ感じたものは報告から想像していたものと全く違うものでした。

ラオスのコンケオ村やポンサイ村、タイのウドンタニなど首都から離れた地域で多くの子供たちや障害を持つ方々とふれあい、その方々は色々な表情を見せて下さいました。中でも初めての公式訪問でラオスのコンケオ小学校を訪れ、友達や先生と無邪気に遊ぶ子供たちの笑顔や澄んだ瞳を見て、「貧困・裕福」「恵まれている・恵まれていない」「幸せ・不幸せ」このような言葉の意味について深く考えさせられたことは一生忘れないと思います。

また、ＣＳＡが支援する高校寮の寮生や卒寮生との交流では、今後ラオスの未来を担う皆さんが、自国の発展を目指す意識の高さにただ驚くばかりでした。

そのようにラオスやラオス国民、文化などに次第に魅かれ、更に知ったものはＡＡＲ・ＪＡＰＡＮ（難民を助ける会）の活動でした。ＡＡＲの訪問で、その活動内容を説明していただき、ラオスには過去の歴史から今でも無数の不発弾や地雷が埋まっており、毎年何人もの人がそれで致命的な被害を被っていることを知りました。自国に非の無い過去の歴史、だが、当時も今も自国では変えることのできない事実がラオスの発展だけでなく、貧困をなくす足枷となっていることに歯痒さを感じました。

世界には私が知らないところで、今回知ったものよりもっと深い貧困やそれを解消できない要因が多々あると思います。自分ひとりでできることは小さなことですが、連帯した活動は大きな力になります。ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加させていただいた私には、今回のツアーで感じたことを忘れず、この経験が連帯につながるよう伝えていく責任があると感じました。

最後に、見知らぬ土地で一週間昼夜を共にし、助け合い時には議論し合った仲間に、もう一度「ありがとうございました」を伝え、私からの感想文とさせていただきます。

コンケオ村小学校で

ラオス教育スポーツ省で

ラオス保健省と

ラオス衣類倉庫で

タイ衣類引渡し式で

羽田空港での解団式

編　集　後　記

アジア連帯委員会（ＣＳＡ）山岡みゆき

日本が全国的に大雪だった１週間、ラオス、タイでは、連日３５度の暑さの中で事業視察と交流をした２０１６年ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加した９名のメンバーは、無事に任務を遂行し、全員無事帰国しました。これは、参加されたチームの皆様、送り出して下さった組織の皆様、ＣＳＡの会長、副会長のお蔭と、厚くお礼申し上げます。

メンバーは、訪問･視察を通じ、衣類支援や教育環境整備支援の重要性を再認識すると共に、児童との折り紙や先生方との意見交換や綱引き、高校生との意見交換、踊りやラオスの伝統的儀式であるバーシーなどの交流を通じ、その国の人間性や文化に触れ、また童心に戻り、学びと楽しいひと時を過ごし、いろんなことを感じました。

また、毎年ラオスとタイの関係省庁等を訪問し、担当局長等から説明を受け、意見交換を行っていますが、今回もＣＳＡのこれまでの活動に対する感謝の念と信頼関係の深さを感じることができました。

さらに、今年もビエンチャンでラオス国立大学に進学したり、社会人となっている高校生寮の卒寮生と交流の場を持つことができました。将来に希望を持ちつつ勉学に励み、目を輝かせている姿を見て、ラオスの未来を背負う若者の支援にＣＳＡが大きな役割を果たしていることをさらに強く実感しました。

事務局は毎年、アンケートのご意見、反省点などを参考にし、できる限りツアーの内容向上を図っていますが、今回は、団長、副団長を決め、日々の事前打合せをきっちりすることにより目的を果たすことができました。

参加者からは、「新しい出会いがあった。予想していたよりよかった。人間の尊厳や幸せの意味について考えさせられた」等の声がありました。

小学校や高校生寮で接した純粋な瞳や笑顔など、忘れられない思い出となると思います。

ラオスやタイで見たこと、感じたことを今後の活動に活かしていっていただければ…。そして、新しい仲間との出会いを大切にしていただければと思います。

関係者の皆様のご協力に感謝いたします。ありがとうございました。

2016 年 CSAワーキング･スタディ･ツアー報告書

発行日　２０１６年３月
発行者　アジア連帯委員会（CSA）
〒105-0014　東京都港区芝 2-20-12 友愛会館 14 階
Tel（03）3769－4177　Fax（03）3769－4178
メール：info@ngo – csa.jp

印　刷　株式会社コンポーズ・ユニ
Tel（03）3456－1541　Fax（03）3798－3303

THE COMMISSION FOR THE SOLIDARITY WITH THE ASIAN UNDERPRIVILEGED